

気になる

高橋 陽子

四歳児三十三名を受け持ち一年が過ぎた。あつという間の一年でその時々では、悩んでいたこと、気になつていたことが、今、終了式を終え子どもたちから離れて別の忙しい日々を送っていると、なんだか遠いことのように思えてしまう。三年保育と二年保育の混合ということも悩んだこともあれば、個人に対して「どうしてそうなの？」と気になって、気になりだす

と、何日も何週間も、個人ばかり追いかけることもあつた。子どもにとつては、いい迷惑(?) だったかもしれない程に。個人だけではなく、その子どもが属するグループのそれ自体も、一人一人も、全部気になる。気になれば私の場合「気になっているのよ」といった顔になつてしまうようで、「何しにきたの？」から「又、来たの?」、「もう来ないでよ」、とますます気

になる態度にさせてしまっていたようだ。いつ気にならなくなるのかな、と考えてみたら、悲しいかな、次に気になる存在が、私の中に大きくなって、今まで気になっていた個人、そのグループより心を占めた時かもしれない。

先日他の幼稚園を参観する機会を得た。時間として二、三十分ではあるが年少組の部屋の片隅に座って子どもたちを見せて頂いた。学年末の三歳児の姿の何とかかわいいことか。四歳児の四月だつてこういう感じを残していたらうに、スタート時の慌ただしさに見えていなかつたなあと思うともったいないことをした、と思う。例えば、男児四、五人がブロックで作った武器を持ってオーレンジャーごっこをしていた。部屋からダーツと廊下に行き出して行く。参観の私に向かつて武器をかまえる。又、ダーツと戻る。「もつと大きくしようぜ」と言いながら、皆で組み替える。又、ダーツと出かけていく。各々が標的に向かつて格好よくかまえ、一人が戻り始めると、皆、戻る。「Aくん、

同じの作つてよ」「いいよ」、で頼んだ方は隣で見ている。作り終えて、又ダーツと出て行く。私が担任で、その場に居合わせたならば、「武器は人に向けないでね」と言っていたかもしれないし、又、武器を持って走りまわっている」と思ったかもしれない。でも、外から見ていると、子ども同士お互いわかつているし、自分たちの中で「ここまで」といったわきまえもあるように思えた（本人たちは意識していない、と思うが）。

他の場面では、二、三人の女兒のグループがおすしやさんごっこをしていた。そこにBくんが「入れて」とやつて来る。「ダメ」と言われたBくん、色々なやりとりの後「カセットを貸してあげるから入れて」と大切にずつと持ち歩いたカセットを渡す。先生の「押しもあって「いいよ」となる。他の男児がくる。「入れて」「ダメ。上ぐつはいるからダメ」。「上ぐつ脱いだよ」「でも、武器を持つてるから、ダメ」。彼は大決心したように、足元にそつと置く。「もう、

持っていないよ」「壊さないから、ダメ」。そつとブロックを外していき、最後はブロックの山を無造作におしやる。「壊したもん」「ダメー」に、ブロックをブロック入れにしまいに行く彼。でも、最後まで入れてはもらえなかった。その日だけその場面だけを見て何もコメントは出来ないけれど、一回目の「ダメ」だけ聞いてもしくはブロックをバラバラにしているところだけを見て、担任が何か言っていたら、違う流れなり雰囲気になっていたかもしれない。私が保育をしていて、その場面だけを見て、気になって声をかけてどんどん深みにはまってしまったことが何度もあったことを思い出した。

Cくん、早生まれ。三年保育。入園当初より気になったことは、ことば遣い。「おめえ」「ばかやろう」「何言ってるんだ」と、ありつたけの悪態をついて自分の世界にちよつとでも入ってくる人を牽制する。時には物を投げる、壊す、人にかみつくなど、ガードが固く、入りこむ隙間の微塵もないような感じだった。

彼の気にかすることの一つは、月齢。十二月のお誕生日会の日に「おれは今三歳十ヶ月だからあと二ヶ月したら四歳になるけれど、Dは三歳九ヶ月だから、おれが四歳になって一ヶ月したら四歳になる」、と言ったときには、彼の生きづらさを感じるとともに、「気にさせてしまっているのかもしれない」と気になる私があった。入園当初から気になる子どもで、二学期間一緒に過ごしてもまだ、気になる要素がみつちり詰まっていたので、今思えば悪い方への相乗効果とでもいおうか、気持ちを軽くする手助けをしているようで逆のことをしていたのかも、と思うことがある。

ある三学期の帰りの片づけをしている時のこと。Cはそれまで粘土をしていた。「片づけましょう」の声に即反応した男児（Eとする）が「もうお片づけだよ」と言ったところCは間髪入れず殴る、ということがあった。Eは怒ってCの粘土をぐしゃ、とつぶす。Cも怒ってEを殴り、Eは泣く。そこで担任は気づいたのであるがEが泣き隣にこわい顔をして掴みかかる

うとしているCがいれば、とっさに「Cくん」と止めに入る。お帰り間際という私にとって一番気持ちが高揚している時でもあり、何とかおさめなくては、という思いばかり出て、対応していた。そしてCの怒りの理由はきちんとはわからないままに時間ばかり経っていく。焦り。ついにさようならの後にまで親に理由を言って、Cにどうしたのか、でもやってはいけないこと、を繰り返して言った。ついにCから本当の理由は聞かされることなく、うやむやに終わらせてしまったような気がする。気になる子どもを、何とかしたい担任の思いの重さが、何も見えなくさせていたのか。参観させて頂いた年少児たちの姿から、色々な場面でのCとのやりとりを思い出していった。

Cも年中にありがち、人とのやりとりも出てきた五月後半のある日。年中から入ってきた四月生まれの体の大きなF（幼稚園の経験なし）と人気がない隣の隣の保育室に入っていく。半ば追いかけるような形でその部屋に入り、隣に座る。Cが空の箱に手を入れて「何

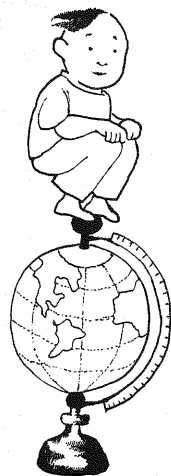
を出して欲しいか言ってみろ」と独特の口調でいう。

（四月に誕生会に参加した時自分の誕生月でどうのではなく誕生日の歌がわからないからもう誕生会は出たくない、といったF。少しずつやりとりの楽しさを感じてきていたところだった）Fは何を言われていて、何を言っているか全くわからない、という感じだったので、私が「じゃあ、ケーキをお願いします」と言う。Cは「ハイ」と空箱から取り出して渡すしぐさをする。私も「おいしいですね」や「おかわり下さい」と言う。そのやりとりをじっと見ているF。しばらくして三年保育からの友だちが来て、Cの問いかけにくく普通に答えていく。たまに私が「Fくんの分も下さい」と言えば、さっと渡してくれるC。戸惑いながらも受けとるF。そのやりとりが楽しくなって、興奮状態になったの終わり方だったがその後何日間か、CとFは一緒にいた。Cは独特な命令口調や、態度が出るので、Fは自分の居易い場所を探して、離れていったようだった。

そういうCにも殆ど一緒にいる仲間（G）がいる。Cを丸ごと受け入れて一緒にいるのか。ある時、その声になり出した。会話を聞いてみるとやはりCは自分の世界を語り、そこにGを巻きこんでいる。Gは返事はせずについていく。何度も「行かなくていいんじゃない？」や「本当はどうしたいの？」や「Gくん、○○しようよ」と問いかけた。Gはどのことばにも返事はしないで、じつと担任の顔を覗きこむようにしている。その目は「そうなんだ。本当は違うことをしたいんだ。でも、できないんだ」とも「いいんだよ。先生こそ。何言ってるんだ？」とも受けとれた。何を語りたいのかわからない目。それを理解できない私。何だかしつくりいかなない日々が続く。

Gのはじめのイメージは物わかりのいい黙々タイプ。年少時三学期「ぼくのパパは○○に乗ってる」と言って、積み木やお店やごっこでよく使う台を組み合わせて○○を作って乗ったり、いつの間にかそれがパトカーになって交番ごっこをしたりしていた。年中組

になって、朝来てしばらくの間、エプロンに安全ピンでとめてあるハンカチを口にくわえてボーとしていることがあった。Cから声をかけられればそちらに出かけるがなかなか自分から行動にうつすことはしなかった。一緒にいたはずなのにCのまわりで事が起こっても「ぼくじゃないよ、知らないよ」とでも言いたいように、座りこんでいることもあった。Cのイメージから抜ければ、Gのやりたいことがわかり易くなるかもしれない、という思いや、やりたいことをやっていいんだよ、いやならいやって言っていいたいんだよ、と伝えたい気持ちが相まってつい分Gに問いかけてきたと思う。CとGと離れる時間があったて、Gだけ砂場に熱中



していたり、大型積木の上でんと座っていることもあるが基本的にはCとGは一緒にいる。どうもGの育ちからして、人に言われて行動する方が過ごし易かったようだ。そんなGも、年中二学期終わり頃から、片づけの時間になるとすつといなくなったり、いつまでもおしゃべりがとまらなかつたりで、物わかりのいいイメージは消えかけている。

年中二学期の十月に、新しいブロックを出した。はしごのようなパーツを六、七コつなげて折りたたみ、それを持った人たちが仲間を作るようになった。C、G他数名で作るので、六、七コ確保できない時もある。Cは「先生、おれはニコしかもっていないのに○はたくさん持っているから、○○に言ってくれよ」と言ってくる。自分で交渉するのが苦手です必ず先生を頼ってくる。行き違いの多い彼と私の間だからこそ、こうやって頼られた時は真剣にやりとりをする。その間、彼は私のひざに座りベターと体を寄せてくる。交渉が成立し、折りたたみ式のそれを手にすると（それ

はブーマランだそうだ）顔つきが変わる。さつきまでベターと体を寄せていた時の心配そうな表情から「悪いやつはどこにいる、いたらこのブーマランでやつつけるぞ」といった険しい表情になる。時には玄関扉に向かつてブーマランを投げたり、遊戯室の舞台で投げっこしている（人に向けてはいけないことは、わかっているようだ）。硬いブロックである。扉や床にへこみ傷ができることもある。ブロックだって角がへこんだり外れて人に当たることもある。それを険しい顔つきのCに止めさせようにも耳がないかのようにやり続ける。そこで回りの子どもたちに声をかける。Gを含め他の人たちはその場はやめる。が場所をかえて同じことの繰り返し。ついつい「また、あなたたち！」と声を大きくすることになる。

気になる子どもに声をかける時、どうもしっくりいかないことが多い。Cの本当に切ないまでの口調（年長児に追いかけられた時「先生、追っかけないでって怒ってよ」という。なかなか行けないでいると、私の

状況にはおかまいなしに「陽子先生、早く、こっちに
来てよ。こんなに呼んでるのに何で来てくれないんだ
よ」と叫ぶ。)で私を頼ってくる時の様子と、全くこ
ちらの言うことに耳を貸さないでいる時の様子。その
他色々な姿をみせるC、生きづらさを感じさせるCに
声をかける時、私は一瞬何かためらいを感じる。そこ
からしつくりいかない気持ちを残すのだろうか。

最近「Cくん。変わってきましたよね」と何人かの
先生に言われる。「立ち止まって、こつちを向いて聞
くようになったね」とも、「最近めつきり部屋(Cの元
のクラス)に来なくなってたと思つたら、今日突然現
れて、なぞなぞ出していった」とも、「〇〇する
のはどう? と他の子に聞いていた」とも。そしてあ
る日、粘土で食べ物を作りそれを売りに行く、と言
う。年少組に向かった彼らの後をついていきどうする
かなと覗きみていると「これ、欲しいやついるか」の
ように言っている。その場は、年少の担任の先生がう
まくとりもち、もらってくれる子がいた。二回目、行こ

うとしている時「食べる人、いませんかってやさしく
聞いてみると、たくさん買ってきてくれるんじゃないか
な」と声をかけておく。又々後ろからついていきドア
の陰から見ていると、Cは口ごもりながらもそんな風
に言っていた。CはCであるから、全てが変わること
はないと思うし、気になる担任は変化すらも気になる
のかもしれないが、その時その場で出会つたCをきち
んと見て対応して変化を感じてくれる色々な大人(先
生も用務員さんも)に囲まれて着実に成長していくこ
とと思う。

Cのことばかりになつてしまつたが、気になる人は
たくさんいる。(ゲームの話を殆んど一日中している
人、疲れたように、イスに座りこんでいる人、ケンカ
してにらみ合つては笑つてごまかして、解決してしま
う人、二人そろつて一人のような人たち。)気になる
人たちに気になつている担任がどう関わるか、悩み多
き日々である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)